表2（左ページ）

百年物語

百年物語は、次代の生活文化を創造していく道具として、「100 年後にも大切にしていきたい生活文化を、楽しみ、維持し、継承していくための道具」を基本テーマとしています。
そのために、大量生産大量消費ではなく、少量生産・個人対応・長寿命型をテーマにすることで、
「一人一人の価値観や個性に対応し、愛着を込めて使用し、また人に贈れるモノ」
「道具そのものが職人的な技やデザインの美しさを楽しめるモノ」
「日本の新潟という産地の魅力と力を世界に提供することで、よりよい生活文化を創り支えるシステムを構築していけるモノ」として開発し提案していきます。

ホールマーク

百年物語商品は、新潟の工業や工芸作家が力を合わせて新しい道具のあり方と価値を創り出しています。こうしたコラボレーションが可能になったのは「にいがた産業創造機構（NICO）」という新潟県の財団が中心となって、いろいろな企業や工房をネットワークし、支援して開発を進めてきたからです。
そしてこのようにして開発された商品について、そのクォリティを証明するためのマークを付与しました。このクォリティマークは下記のように三つで構成されています

CENTENNIAL VALUE COLLECTION

「百年物語」という考え方とクォリティを持った商品という証明マークです。

FROM NIIGATA

新潟県を代表する鳥である「朱鷺」をモチーフにしたマークで、新潟県で作られたものであるという地域の技の証明マークです。ちなみに朱鷺はニッポニア・ニッポンという学名を持ち、日本を代表する鳥でもあります。

THE YEAR OF THE DRAGON 2012

開発年度を表します。日本の年度表示は西暦と共に十二支をテーマにした呼び方もあります。2012 年は辰の年であり、その漢字をデザインし、開発年を証明するマークとしました。

02ページ

My Way of Life わたしの流儀

良い道具はヒトを元気にする

情報化、国際化、地球環境変化が進行し、社会の在り方が大きく変化してきています。その中で私たちも、自分の暮らし方を見直していかなければなりません。どのような暮らし方を大切に残し、どのような新しい文化を選んで取り入れていくのかが問われています。次代への自分なりの生活流儀を再構築していくためのテーマ例と、それを実現するための道具を、新潟から提案します。

03 ページ

1 お茶を日々、楽しむ

お茶はリフレッシュのための飲料であるとともに、ゆとり、自然とのつながりを体感する時間を楽しむ文化でもあります。その文化を大切に、いつでも楽しめる生活を実現するための道具を提案します。

2 新しい美しさを発見する

次代変化にかかわらない普遍的な美と、時代とともに創り出されてくる新しい美の双方を楽しむ流儀を持ちたいものです。その新しい美の発見を提供する、金属の新しい美と生活の楽しみのための道具を提案します。

3 生活をアートする

日々の生活を美しく演出していくことは、心を育て、感性を広げる、一生続く楽しみです。その流儀と道具を、空間から、食卓、仕事デスクまでいろいろな視点で提案します。

4 創ることを楽しむ

モノを創る、食を創る、作物を育てるなどの、 創ることは、人の生き方や考え方に深く関わり、豊かにしていきます。そのための道具を提案します。

04 ページ

いつどこで、誰とでも。
きよらかなる
茶の時間を持ち運ぶ。

良寛*がしたためた書「心月輪」は、円い月に映した「清らかな心」を意味する。ひととき迷いを忘れ茶をすする無心の時。それがいつ、どこへでも持ち歩けるお気に入りの茶器で淹れる一服であれば、なお心やすらぐ。玉川堂の携帯茶器揃は「心月輪」のように、茶器入れをはじめ急須、茶筒、茶托、そして菓子器に至るまで、しなやかな円さを大切にした一品。一枚の銅板を金鎚で叩きながら立体へと成形するその精巧な鍛金技術が、滑らかでしっとりと吸いつくような肌触りを生み出す。またその後、銅に多彩な着色を施す術(すべ)は、世界において玉川堂のみが伝え表す技であり、身近な愛器として使うほどに光沢を増し、円熟味を帯びていく。その様はさながら、使い手へのご褒美のようである。一つ一つの道具を大切に包み込むのは、伝統的
な織物の亀田縞の巾着袋。白磁に薄く釉薬を施した茶碗が、シャンパンゴールドに光る茶托と優しく寄り添う。たった一杯の無上の味わいのために集結した、新潟の技である。
*良寛――江戸時代の僧侶で歌人、書家

（写真左）それぞれ巾着に入れ1 つにまとめることができる

（写真右）湯呑は新潟の工芸界を代表する白磁の作家石川満氏の作。

05ページ

<ML001> Tea set for carrying『Shingetsurin』

本体は純銅を使用し、鍛金加工（金鎚で金属を叩く加工）で成形しており、その技術は文化庁と新潟県より「無形文化財」に指定されている。1816 年、近郊の弥彦山から産出された銅を使用し、初代玉川覚兵衛が創業した玉川堂。海外博覧会受賞、皇室献上の栄誉を受け、現在では国内唯一の鎚起銅器産地として技術を継承している。玉川堂の銅製品は金鎚で丹念に叩いているため長年の使用に耐え、修理可能な点も魅力の一つ。急須の蓋と取っ手には、熱の伝わりにくい素材を使用。銅と同様、使い込むほどに深みと光沢を増す色合いが、風情を醸し出す。

（写真）金鎚で金属を叩き「銅」に命を吹き込む

06ページ

一杯のコーヒーや一服のお茶で、気分が変わると、外の世界が一変する。そのくらいカフェタイムは貴重で大切な時間。寛ぎのひとときを優雅に過ごすか、無為に過ごすかで、人生のすべてが決まると言っても過言ではない。カップの美を愛（め）でながら、エスプレッソを飲む瞬間、私流儀を貫く。マルナオ３代目の福田隆宏氏が企画し、デザインしたエスプレッソカップの手触り、美しいフォルム、柔らかな口当たり。それらは繊細な感覚で、体と心を刺激する。

黒檀の美しい縞模様と紫檀の赤みを帯びた気品のある色あい。木本来の美しさに、カット加工による陰影が加わる。茶道で千利休が好んだ「わびさび」に通じる世界を感じさせる。黒檀と紫檀の重厚な質感を残したまま、シャープで強いインプレッションを与えるカップ。ほとんどが手作業で形づくられる。堅い木が、熟練の技でカップの魅力に昇華していく。置いてあるだけで、存在感のあるカップ。静かな力の流れを感じ、物との対話が生まれる。木の本質を知り尽くしたマルナオだからこそ、生みだせる究極のカップで、人生を豊かにするエスプレッソタイムを！

07ページ

<ML002> Wooden life

何百年も生き続けた木の個性を美しいフォルムで表現したエスプレッソカップ＆ソーサーとティースプーン。創業以来70 余年、細部にまで、緻密な描写を求める彫刻の伝統技を大切に受け継いできた。その技が、高い精度と美しい仕上がりに表れている。素材は、木目の美しい縞黒檀と鮮やかな色の紫檀を採用。どちらも硬く、重量、耐久性のある銘木である。木の口当たりは優しく、唇に熱さを伝えない。日常の中で、忘れがちな木の感触を取り戻すことができる。また、象嵌の部分には純銀を使用。木の中で異素材の銀が冷光を放ち、アクセントになっている。カップは、柔らかな印象の木目とカットによるシャープなラインが交錯し、360度違う表情を見せる。

樹齢何百年の木とともに、
自分だけの大切な時間を味わう

08ページ

<ML003> IKEDAMA

IKEDAMA は、自然な石の形状をした「石」の中・大の大きさの商品がある。シンプルなデザインが、和室や洋室にもマッチする。また屋外のデッキや枕木などの上に置いても、異素材のマッチングが楽しめる。

09ページ

生活の中にいろいろな緑を

緑や花に囲まれた空間は、毎日のくらしをハッピーにしてくれる。ガーデニングやベランダでの花の栽培など、大掛かりなものだけではなく、ダイニングのテーブルにちょっとした挿し花があるだけでも、癒しのアクセントになってくれる。日本には、華道という伝統的な文化がある。華道は色鮮やかな花だけでなく、枝ぶりや木の幹の形状、葉や苔などすべてを花材とし鑑賞する点でも、海外のアレンジの概念とは一線を画している。伝統や流派などにこだわらず、自分なりに手軽に華や苔などを活けたい。そんなニーズに応えた花器「IKEDAMA」ができあがった。道に転がっている石ころのような自然で有機的なフォルム。
アルミの鋳物のざらついた銀の発色。その上面に複数の穴が開いている。その穴に自由に挿し花をすることができる。また、苔や苔玉をのせたり、中に種をいれて穴から芽を出させたり。自分流の生け花の楽しみ方が可能だ。さまざまな花の色、そして葉の緑がアルミの銀に映えて美しい。空間の中で主張しない静けさ漂うフォルムは、花を活けることでやんわりと存在感を醸し出す。

（写真）型へアルミを流し込む作業

10ページ

新しい素材が生んだ、美しい物たち

ペンホルダーはエグゼクティブなステーショナリー。積層鋼の素材を棒状にのばし、表面を徹底的に磨き鏡面に仕上げる。完成には職人の技をもってしても３日はかかる。これほど手間隙のかかった贅沢なステーショナリーがほかにあるだろうか。クリエイティブな人、アーティスティックな人に贈りたい逸品。妥協を許さない本物。袖口に白銀に光るカフスは、洗練された男の色気を感じさせる上品な輝き。諏訪田製作所が、積層鋼を立体的に加工して生み出した新しい美。この新素材から生まれた百年輝き続けるカフスとボタン。カフスは層を縦に、ボタンは層を横に、熟練工が切削加工し立体的に磨きあげた。新素材と、その魅力を最大限に引き出す職人技の見事な融合だ。

（写真左）刃物の先を研磨し、仕上げる職人の技

（写真右）積層鋼

積層鋼とは、文字通り金属を幾重にも積み重ねて鍛造* し、断面に層を浮き上がらせた素材。硬さのちがう２種類のステンレスが層を織りなし、その断面には２つと同じものがない神秘的な縞模様が浮かび上がる。これまで刃物など平面的なものに加工されていたが、そこに新しい美の可能性を発見し、独自の技術で立体的に造形した。

* 鍛造（ 大きな力で何度もたたいて材料を鍛え上げること）

11ページ

<ML004> Damascus Layered

このカフスはとめ具がないので壊れることがない。だがそのため、装着するのが少しだけ面倒。実はこれこそが作り手からのメッセージ。手がかかるからこそ愛着がわく。愛着がわけば長く使ってもらえる…。そんな願いがこめられている。しかし、その装着部分でさえもなんと美しいことか。百年輝く一生の愛用品にするのにふさわしい、全てが一点もののカスタムメイド。シンプルなデザインは、カジュアルにもフォーマルにも、使う場所を選ばない。男性だけではもったいない。スーツを着こなすキャリアウーマンも、ちょっとダンディな女性バーテンダーも、小粋に袖口のおしゃれを楽しめるよう小さいものも作った。ペアでつければなおさらセンスが光るだろう。

12ページ

日本伝統の技と美を内包した愛おしい家具

例えば、細く長い角材が整然と並ぶ縦格子。例えば、戸は閉めたまま障子の一部をスライドさせることで、日本間に座しながら雪降る庭の風情を楽しめる雪見障子。伝統的な日本家屋に見られる建具は、溝やホゾ穴など継手の加工を施した幾つもの木材を組み合わせて面を成し、緩やかに空間を仕切る。通風や採光という実用性と、日々の暮らしの中に在っても飽きることない静かな美しさを併せ持っていた。この日本特有の建具の技と美を、ネストテーブルで表現した。

３点のテーブルに共通するデザインは、シンプルな美しさが際立つ縦格子。そこに、雪見障子のように格子を滑らかにスライドさせる技を盛り込み、「建具屋にしか作れない家具」になった。格子に使う素材の選別から組み立て、仕上げ調整まで、建具職人の技が注ぎ込まれている。かつて日本家屋で建具が、用と美を兼ね備え、暮らしに溶け込んでいたように、このネストテーブルはあなたの住空間をさりげなく美しく彩ることだろう。

（写真）個々の木材が持つ癖を長年の経験により削りながら読み取っていく

13ページ

<ML005> Nesting Table

素材は堅牢なウォールナットを採用。格子部分には無垢材、足部分は強度を保つため集成材と使い分けている。テーブルの形に組み上げた後も微妙な調整を何度も繰り返し、縦格子のシャープな美しさと滑らかな動きを追求した。大、中のテーブルは幅10mm に刻んだ細い格子が等間隔に並び、面を構成する。格子の一部を外側に軽く引き出すと天板が拡大し、引き出された格子の動きによって天板面のデザインもダイナミックに変化する。一番小さなテーブルの天板は折りたたみ式。ふっくらと丸みを帯びた四つの木片を展開すると、ひと回り大きなテーブルとなる。

14ページ

快適な時間と空間を与えてくれる、「和」アートな逸品

「パソコンまわりをもっとおしゃれに、もっと機能的にすれば、仕事も生活も快適になる」。をコンセプトにデザイン性を追求したパソコンスタンド。素材はこだわりの天然木。木を知り尽くした職人の手は、寸分のくるいもなく天板の波型を作り出す。マホガニーカラーの美しくモダなパソコンスタンドによって、冷たく、無機質だったパソコンが、やわらかく、温かな風合いに包まれる。パソコンベースという最新のアイテムと、日本伝統の職人技とが融合して生みだされた逸品は、四角い金属の塊をどんな空間にも調和させてくれる。デザインだけでなく、その機能も秀逸。日本独自の木工加工の技法で、金具をつかわず木の先端に凹凸をつけて接合させる職人技が、より美しいフォルムとよりスムーズな天板の動きを実現させた。行き場のなかったマウスやアダプタ、コード類も、トレイや引き出しにすっきりと収納できる。

15ページ

<ML006> Laptop Computer Stand

パソコンの長時間使用は、肩凝り、頭痛の大きな要因。一方、現代人の生活に不可欠となりつつあるパソコン。スタンドの天板を自分の目線に合った角度に合わせ手元の傾斜を調節すれば、驚くほどに疲れにくくなる。波型や水玉にデザインされた台は、その美しさもさることながら、排熱で高温になるパソコンの熱を逃がし劣化を防いでくれる。細部にまで心を行き届かせる職人の心配りとそれを実現させる技術は日本の誇り。

（写真）1ミリのくるいもなく天板の波型を切り出す

16ページ

<ML007> Hanshidou Incense box（Leef）

葉っぱに形作った香箱は、蓋をスライドすると中に二つのスペースがある。一つはスティックタイプのお香を数本入れられる収納部、もう一つは付属の銅製香立てを使い香を焚く香皿部分となる。外出時にはお気に入りのお香を入れて手軽に持ち運び、屋外はもちろん、室内でも安全に香炉として使用できる。今作は「斑紫銅」と「斑紫銅」の器物をさらに乾燥松葉でいぶし、黒く変色させて斑紋を磨り出した「黒色仕上げ」の２種類を揃え、原惣右エ門工房の真骨頂を見せる。柿の葉・銀杏・芒（すすき）の三つの葉を合わせると円になる仕掛けも、日本らしい情緒である。

17ページ

愛しい香りを連れて、心はずむ旅をしよう。

香りを感じることを日本人は「香を聞く」と表現する。繊細な香りは心に呼び掛けるもの――風にのる木の葉をイメージした携帯用の香道具は、唯一無二の思い出を刻む旅にこそ持って行きたいアイテムである。蝋型鋳金は古代エジプトで始まったとされ、日本では奈良時代から見られる技法である。松やにと蜜蝋で原型を作り、それをもとに真土（ まね）という蝋型鋳物用の土
を使って鋳型を作成し、溶かした金属を注ぎ入れ成形、器物を作る。

新潟県では1978 年、無形文化財に認定している。さらに鋳込みと磨きがすんだ器を炭で囲い、約800度で焼き酸化膜の跡を生成させる「斑紫銅(はんしどう)」は、まさに炎が生み出した芸術品といえる。「Hanshidou Incense box（Leef）」は、日本の自然の美しさを柿の葉、銀杏、芒の葉で表現し、持ち運びがしやすいよう蓋をスライド式に、また極力軽くするためミニマムなデザインに徹した。繊細な原型作り、金属を扱い炎を操る大胆さ、そして丹念な磨き上げ――時代に愛され受け継がれるモノの好さを、今、携帯できる喜びと共に感じ入りたい。

（写真）蝋と土、木枠を使って作り上げた鋳型に溶かした金属を流し込む。

18ページ

一反の布で日常をアート
自由な感性で空間を演出

日本には、掛け物という住まいのアートがある。書や画を床の間にかけて、空間全体を季節感やめでたさ、時にはメッセージ性をもたせる演出を行ってきた。従来の「手ぬぐい」は短くカットされているが、出来上がりは反物の状態である。職人の手作業で生まれた布は、一枚の掛け物のように美しい。反物は、大人の着物一着分の布を巻いて、コンパクトに収納されるが、広げれば10mの長さになる。
使う人の感性で、365歩分の長さの布を、自由にカットすることで、多様な使い方が生まれる。布を手にした人に委ねられる使い道。アートは、美術館やアトリエの中だけにあるのではない。日常の中で個人が楽しむものである。藤岡染工場は、日本でも数少なくなってきた「注ぎ染め」にこだわり続ける。その心意気が、職人の技とともに、反物にあらわれる。アートが自分流を貫くことだとしたら、藤岡の生き方がまさにアートなのかもしれない。

19ページ

<ML008> Hand dyeing TENUGUI cloth

「手ぬぐい」の枠を超え、用途を広げることで、気軽に和の感覚を生活に取り入れられる。「茶道具」「電光掲示板」斜視効果の「立体」と「波」「ぼかし」の5 種類のデザインは、100cm で一つのパターン。全体は10mに及び、使う人の創造力を刺激する。布は、日本の伝統的技法の「注ぎ染」で「両表面」になっている。製作は手作業で、折り重ねた晒生地に型紙を置き、糊置きをするが、特に熟練の技を必要とする。おがくずの上で、糊を落ち着かせ、ジョーロを使い、染料を注ぐので、「注ぎ染」と呼ばれる。竹竿で、長い反物を回転させながら糊を洗い流すと、布には鮮明なデザインが浮かび上がる。

（写真）染めの出来栄えを決める糊づけ作業を行う熟練職人

20ページ

中世の女帝を魅了した漆と蒔絵の美を今に。

江戸時代、水の都(新潟) には非常に多くの塗りの技法が集積し、300 年間、その技法は脈々と受け継がれてきた。今回、5 人の職人がその伝統の技を豆皿に表現した。小さくて、思わず手に取りたくなる器は、使うほどに艶をまし、料理やお菓子、小さなフルーツの色味を引き立てる。中世のオーストリアで女帝マリア・テレジアに、こよなく愛された日本漆器。娘のマリー・アントワネットは、蒔絵に夢中になった。漆黒の気品ある美しさと金の繊細なデザインが、宮廷の淑女たちを魅了した。
日本美の極みとも言える漆器は、大切なお客さまをおもてなしするにふさわしい器だ。また、新潟漆器は、下地から漆を塗る「堅地塗り（かたじぬり）」により、丈夫で扱いやすく、普段使いにも適している。日々のお茶や食卓に、この豆皿を添えることで、清新な印象のテーブルコーディネートになる。長く愛用し、塗り直しなどの修理をしながら、家庭に受け継がれる漆器は、ロハスな暮らしそのものである。

21ページ

<ML009> Niigata urushi mamezara-collection

それぞれの豆皿に、新潟漆器の特徴である変わり塗りの技を施した。新潟漆器を代表する竹塗りを縁に用いた豆皿。平安時代から使われ、洗練されたデザインの家紋を蒔絵で装飾した器などのコレクション。木地には、完全に乾燥させたブナを使用。滑らかな手触りの面は、木地固めに始まり、下地、錆付き、研ぎ、下塗り、中塗り、上塗りなど何十工程を経て、さらに竹塗りや蒔絵の仕上げが加わり、2 カ月以上の時間をかけて出来上がる。漆器には、美しさだけでなく、抗菌作用と防水、防腐作用がある。

（写真上）側面木地ではなく、塗り（漆を盛り上げること）で竹の節を表現。

（写真下）漆をつけた筆で家紋を描き、金粉をのせる蒔絵の技

23ページ

温故知新でヘルシーな和食を手軽に楽しむ

野菜をスライドさせると、その切れ味が道具を通して、手から脳へストレートに伝わる。カットされた野菜は乾燥させるだけで、「干し野菜」になる。プリンス工業の高野社長は、東日本大震災と福島の原子力発電所の事故以来、「食の安全」のことが頭から離れなかった。その時浮んだのが、日本に昔から伝わる「干し野菜」だった。社長は、誰にでも手軽に「干し野菜」が作れる道具の開発に取り組んだ。「干し野菜」は天日に干すことによって、栄養価が高まる。カット済みなので、その後の調理の手間を省ける。スピードが求められる現代にもマッチしている。冷蔵庫に残った野菜がヘルシーで、重宝される保存食に生まれ変わる。日本は古くから、エコの精神が宿る国だ。「もったいない」という心と和食の知恵が、新しい道具の中に生かされた。プリンス工業は、食生活の基本に立ち返り、世界中で注目される和食のカテゴリーに、「干し野菜」という新しい風を吹き込もうと挑戦を始めた。

<MLO10> Kitchen Tool series

一点一点の丁寧な仕上げによる、スライサー（平切りと千切り）とピーラー。お客様の声を大切に常に使いやすさを追求し続ける。シンプルに徹したデザインが、フッ素樹脂コーティングならではの美しい質感を際立たせるとともに手入れを容易にした。ピーラーは、刃部のすきまの違いにより、厚さが調整できる。カットされた野菜の食感を大切にしている。切れ味が持続するように工夫された刃の角度は、プリンスならではの技術。他社には真似できないプレス技術も多数あり、業界からの評価は高い。

（写真）精度を高めるための微調整

24ページ

良い道具を手にした感動が創作意欲をかきたてる

角利製作所は、取引先のあるドイツにもファン層を広げている。ドイツと日本のものづくりのそれぞれの良さを融合し、より機能的な製品を追求してきた。技術面だけではなく、ドイツのスローライフスタイルに、大いに刺激を受けた。そんな豊かな時間を生み出す道具として、新しく女性を意識した大工道具を開発した。大切にしたのは、スピードや効率ではなく、仕上がりの美しさ。その結果、生まれたのはどんな作業もできる万能な鋸。女性らしい柔軟性をそなえた、しなやかな道具が誕生した。全ての道具の持ち手には赤樫を使っている。赤樫は木目が綺麗で強靭である。ただ強いだけでなく、粘りがあり、折れにくい。手になじむ形は、シンプルでありながら清々しい美しさをあわせもっている。誰もが気軽に手に取りたくなるデザインだ。良い道具がもたらす、作る喜びは、人々をリフレッシュさせて、人生に潤いを与えてくれるに違いない。

（写真）切れ味を確かめつつ、革砥で研ぎ澄ます

25ページ

<ML011> Female craftsman

なによりも女性が作る楽しさを感じられる道具づくりを目指した。手で握る部分には赤樫を使い、手になじみやすいようにオイル仕上げを施した。そして、道具の一部分にレーザーマーキングでロゴを入れ、初めて道具に触れる人でもその部分を握ることで、力が伝わりやすくなる目印とした。また、女性の小さな手のひらを考え、通常より握りやすい小さめのハンドルにこだわった。それらを収納する道具袋は従来の大工道具袋のイメージを一新し、単に収納するだけではなく、持って出かけたくなるようなスタイリッシュなバッグを目指した。

26ページ

晴れた日は、愛用の道具と
一緒に自分菜園に出かける

家庭菜園を毎日の楽しみにしている人たちに、楽しい時間とともに道具を使う楽しみも提供したい。ありきたりや間に合わせではない、使い込むほどに愛着のわく、生活のパートナーにまでなりうる道具がいい。そんな道具がここにある。重厚感のある５つのアイテムは、それぞれが芸術品の域にまで達したフォルム。

燃え盛る火の中で真っ赤になった鉄をたたき広げ、丹精こめて形づくられた移植ごて。その表面に残るハンマーの跡に、職人の手のぬくもりが感じられる。相田合同工場は農具のスペシャリスト。火床の火が燃え、鉄をたたく音が響きわたる工場でつくり出される農具はおよそ４０００種。日本各地の土や作物に合わせたこだわりの農具、その１つ１つに取扱説明書が添えられている。こだわって作った道具の力を最大限に活用してもらうための粋なはからい。「とことん使い込んで心から愛着がわいたら作り手に会いに来てもらいたい。それは職人冥利につきる」と語る職人の顔が輝く。

27ページ

（写真上）用途に応じて持ち手を装着

（写真中）sennari tools[vintage] の素材は錆びて役目を終えた鍬や刃物の鉄。鍛冶屋熟練の技で再生させることで、より強くより味わい深い、熟成された風格が備わる。

（写真下）丹念に鋼を鍛え上げる

<ML012> [98] Sennari tools

バッグを開けばイングリッシュガーデンをイメージさせる５つのアイテム、「大小２つの移植ごて」「フォーク」「ショベル」「草けずり」。これらは使いやすさを考えて少し大きめの作り。一度役割を終えた農具などを再生した鉄と、手入れが楽なステンレスの２種類の素材から選べる。すべて持ち手が筒状になっていて、シーンや使い勝手に合わせて柄が変えられる。セットされている風合いと長さの違う３本の柄は、地元のウワミズザクラの木で作ったもの。付属の帆布のバッグで菜園へ持ち運んだり、開いて納屋の壁に掛けておいたり…。これまで畑の隅に置きっぱなしだった道具に、帰る場所を作った。バッグにしまうためには土を落としてやることが必要。これは、道具をいつまでも大切に慈しんで使ってもらうための仕掛けである。

百年物語を創りだしている新潟県のメーカーたちは、この商品群に見られるような優れた技と感性を持っています。そして、その力を世界に役立てたいと思っています。
次代の優れた道具を、あなたの生活文化感性と新潟のメーカーの力で、ともに創りだしていきませんか。
我々は、あなたのための工場でありたいと考えています。

1）GYOKUSENDO CO.LTD.　（株式会社玉川堂）
一枚の銅板を金鎚で叩きながら立体へと成形し、世界でも玉川堂のみが保有する多彩な着色を施す。玉川堂の鎚起銅器の技術は、国の無形文化財に指定されている。

2）MARUNAO CO.,LTD.　（マルナオ株式会社）
職人の手技と最先端技術が融合した箸やカトラリーは、個性的な風格を醸し出す。道具であることを忘れずに、人生のパートナーとなる道具をつくる。

3）NEOS CO.LTD.　（株式会社ネオス）
ネオス：企業の課題やブランディングをデザイン的な視点で解決する。
アルモ：アルミ合金鋳物の図面製作から仕上げ加工まで、社内一貫製作する。

4）SUWADA BLACKSMITH WORKS, INC.　（株式会社諏訪田製作所）
刃物本来の持つ機能「切る」ことを追い求め、鍛造から仕上げまですべて熟練職人の手で行い、常に「新たな最高品質」を生み出していく。

5）NOMURA MOKKOU CO., LTD.　（有限会社野村木工所）
木製品の建具及び家具を通じ、心の安らぎや快適な生活の役に立つことを使命とし、時代が変わっても「木」にこだわった職人集団として進化し続けている。

6）Ohminato Bunkichi Shoten Co.,Ltd.　（株式会社大湊文吉商店）
木・紙・竹に関するモノはオーダーメイドの一点ものから注文が可能。創業から138年、伝統の業に新しい技術を加え、顧客満足度と向き合っている。

7) Okubo Casting 4th Generation Seiun Souemon Hara　（大久保鋳物　四代晴雲　原惣右エ門工房）
伝統的な技術を守り、日本人の中にある美意識を大切にしながら、新しい時代の中で求められるアイテムやデザインを自分達らしい形で提案する。

8) ECHIGO-KAMEGONYA FUJIOKA Dying-factory （越後亀紺屋　藤岡染工場）
260年以上の歴史を誇る、老舗の染工場である。「引き染」「浸染」「注ぎ染」など創業当時と変わらぬ技法で、手ぬぐいやのれんなど１点ずつ丁寧に仕上げる。

9) NIIGATA-CITY LACQUER WARE ASSOCIATION　（新潟市漆器同業組合）
シンプルで柔らかなフォルムに、新潟漆器の特徴でもある変り塗りの数々。新潟漆器を代表する竹塗りを縁に用い、洗練された家紋を蒔絵でデザインする。

10) PRINCE KOGYO CO.,LTD.　（プリンス工業株式会社）
アイデア商品を得意とし、道具としての機能は、手から脳、脳から手に伝わる感動を味わえる（付加価値）商品作りを目指す。

11) KAKURI WORKS LTD.　（株式会社角利製作所）
大工道具専業メーカーとして60年に亘り、DIY愛好家、木工職人等に道工具を供給し貢献。海外市場への取り組みも早く、欧米、アジアを中心に販売実績を持つ。

12) AIDAGODO KOJO, INC.　（株式会社相田合同工場）
職人の手で生命を吹き込まれた道具のひとつひとつが、作業の手助けとなる。また親子で長く愛されていくことを念じ、伝統の技にさらなる磨きをかけていく。

※本カタログの内容についてのお問い合わせは、以下までお願いたします。

財団法人にいがた産業創造機構　市場開拓チーム　百年物語担当：芳賀／大島
TEL: 025-246-0044　FAX: 025-246-0030　E-MAIL: hyaku@nico.or.jp